

平成 27 年 10 月 17 日

北関東フォーラム

於：シムックス

中斎塾 北関東フォーラム

平成 27 年度第 9 回

師の存在

理事長挨拶のなかで、木内信胤先生がベルリンの壁の崩壊を予測しておられたという話がありました。少し補足の話を書かせて戴きます。

木内信胤先生は亡くなる前、これからは予測学をしたいと言っておられました。予測学とは、これから世の中にどういうことが起きるかを予測し、世の中の役に立つという学問です。私が「外れたら困りますね」とお聞きすると、先生は「予測が当たったら、なぜ当たったのかを考える。外れたら、外れた理由を研究し考えればよいのだから、当たるとか外れるは大きな問題ではない」と言っておられたことを覚えています。

木内先生がベルリンの壁は崩壊すると言われて数カ月後、確かにそうになりました。なぜ予測できたのか、先生がどのように情報をとっておられるのか、よくよくお聞きすると先生は毎朝、新聞を五、六紙読んで必要な記事をマーカーペンで塗っておられました。それでお終いでしたから、主に新聞から情報をとっておられたのだと思います。あとはご自分が知りたいと思うと、その道の専門家・超一流の人に会われ、話を聞いて自分の肥やしにする。その繰り返しをしておられました。私も木内先生を御手本にして、だんだん自分のスタイルを作ってきました。

先程、ビジターで参加された方に名刺を戴きましたら「温故知新」と書いてありました。温故知新という言葉は、温故知新師（古きを温ねて新しきを知る。以て師たるべし）ですから、リーダー・指導者の条件は温故知新だということです。人間、おぎゃーと生まれて亡くなるまでの間、必ず憧れの師匠が要ります。人間がまっとうな人間になっていくには、師匠の存在が不可欠です。

私は木内信胤先生の前に出ると、立ち居振る舞いが自然と直立不動になっていました。私は昔から、人さまに態度が大きいと言われ続けた記憶があります。今もそうですが、一切気にしていませんし変えるつもりもありません。ただ自分でも驚いたことに、初めて木内信胤先生の講演を聞いた時、終わった後、ふらふらと先生の前に行って「弟子にして下さい」とお願いをしていました。先生の人格に圧倒され、話の内容にも圧倒され、惚れ込

んでしまいました。木内先生に憧れ、先生の言われたことをすべて書き留めたいと思い、お話を必死に記録していたら、結果として自然に速記が出来るようになりました。

温故知新師にある師の重要性はそこにあります。つまり、師匠を見つけなさいということです。その人の言われる事すべて、黒と言われたら黒、白と言われたら白と、心の底からそう思える人が見つければ最高です。佐藤一斎は言志四録の中で、第一の師匠は天地自然・第二は人物・第三は書物、そのいずれかを師匠とすることが出来れば素晴らしい人生を送れると書いています。ですから温故知新とは人間としてまっとうな道を突き進んでいく上で必要な言葉、特に、師匠の重要性を言っているとお考えください。

私は木内信胤先生に憧れ、先生のようになりたいたいと思って学んできました。今思うと、哲学です。木内先生は哲学者です。私は先生から、哲学とはものごとを根本から考えることだと教えて戴きました。私がお話している判断の三原則（本質・大局・歴史）の本質の部分です。本質をどんどん掘り下げているのが哲学的思考であって、ものごとの根っこを考える学問が哲学だと教わりました。更に、学問とは常識だと教えて戴きました。世の中の常識を体系的にまとめたものを学問という。したがって、世の中の役に立たない学問は似非学問で、日常生活の役に立つ学問が本物である。難しいものを難しく言うのは凡人で、難しいものを易しく言うのが本物の学者である。偉く見せたいがために、優しいことを難しく言う学者は偽物だと教わりました。自分が将来、師の立場に立つ事もあると考えれば、この言葉の持つ重みが伝わってきます。

先程、猪瀬理事長が木内信胤先生は思想家だと言われました。思想とは、予測学の先に来る考え方です。木内先生は、「アメリカはこれから驚くほどの勢いで転げ落ちる。世紀が変わる頃には、誰でも分かるからね」と言っておられました。

今、アメリカの時代が終わったということは誰でも分かります。木内先生が言われた予測学の一つですが、その先にあるものは、グローバル社会の終わりです。先生は「グローバルの社会は終わり。食べ物一つとっても、暑い国でとれた食べ物を日本に運んできて食べる。こんな身体によくないことがあるものか。日本の国でとれたものを食べるのが、日本人にとって一番身体に良い。わざわざ遠い外国から運んでくるなど、無駄遣い極まりないし身体をそこねるものだよ」と言っておられました。

グローバルは駄目だということですから、今のTPPは世界を滅ぼすための動きを一所懸命していることとなります。TPP交渉は、自国の利益しか考えていないガリガリ亡者の集まりだと私は思っています。経済とは経世済民です。政治家は世のため人のためにな

ることを率先してやらなければいけないのに、自分の国のことだけを考えるから、他の国に対して嘘をついてもよいと馬鹿なことを言っているわけです。

木内先生は、日本人はこれからの世界を救うと言っておられました。「議論をして相手を打ち負かすのではなく、世の中はこう言う方向へ進むといいねえと言って横を向いているのが良い。日本人は、はからずもそういう能力をもっている実に素晴らしい民族なのだから」と言っておられました。

思想家とはそういうものだと思います。世の中（地球）を良くするため、人間が人間として人生をまっとうしていくための道、その方向・道筋を示す人、それが思想家なのだと私は考えています。

愛と魂のスピーチ

前回お話ししたベルリンでの環境問題のディスカッションに行つて来ました。木内孝顧問から「愛と魂」についてゲストスピーチを頼まれたのですが、なぜ環境問題の会議で「愛と魂」なのか、現地に行つて分かりました。

集まったのは、ドイツ・スイス・アメリカ・中国・日本の主に環境問題を長年討議してきた専門家の方々でした。オゾンの破壊・温暖化・水不足等々、地球環境の破壊によって人類の終焉が迫っている。それに対して十数年、環境問題について討議を重ねてきたけれども、ここ数年は「愛の問題」「魂の問題」で止まっていた。この問題の解決策は今迄の切り口では駄目だ。人間の心の中にあるものが解決策を生む鍵である。そこで、愛と魂をヒントにして話し合いをしようという趣旨でした。

私は、環境問題で議論が止まるのは外国人だからで、この答えは非常に簡単で根っこは一つだと思いました。外国人は理屈で喋ります。言葉と言葉を戦わせて、理屈と理屈を積み上げて相手と理解し合う。こういう手法だから伝わらないのです。言葉で分かるのは無理、心で感じなければ環境問題は解決しません。という内容をお話させて戴きました。更に、「日本人は心で感じる民族ですから、それを皆さんも感じて下さい」と申し上げて、日本民族の心を伝える歌として、西行法師の「なにごとの おはしますかは知らねども かたじけなさに涙こぼるる」を吟じました。

質疑応答の時間に、「ヒントは、日本の出雲大社と伊勢神宮にあると考えます。出雲大社も伊勢神宮も遷宮を致します。これは継続です。ずっと伝えていくために、出雲大社は 60 年の歳月で大遷宮、伊勢神宮は 20 年に一度、式年遷宮をします。日本に来て是非それを体験し、味わって、心で感じて下さい。そうすると環境問題は解決します」とお話ししました。このヒントに対し、活発な議論が交わされ会議は進んだようですが、残念ながらすべて英

語でしたので私は理解できませんでした。後日、まとまった報告書が届くと思います。

論語 — 人生の道しるべ —

素読の基本は、背筋を伸ばして立ち、目線を若干上げて、腹から声を出すと教えています。基本が身に付いたら、次は状況が目に浮かぶような感じで素読をされるとよろしいでしょう。それには中身がある程度分かなければ出来ません。

では、解説を致します。本日は憲問篇 8～11 です。

【八】子曰く、**之を愛しては、能く勞せしむること勿からんや。焉に忠にしては、能く誨うる**こと勿からんや。

この「愛」とは、子供を愛する親の愛です。

子供を育てるには、親の愛が要るものだ。自分で体験させ、考えさせて、悩み苦しむ機会を与えなければ本物の愛ではない。

主君に対しては、真心をもって諫言しなければ本当の忠義とは言えない。

子供を育てるのに、猫っ可愛がりするとろくな者にならないという話は世の中に結構あります。三島中洲も長男には手を焼いたようです。孔子はそれほど息子に困らされたという記述はありませんが、期待が大きかったのかもしれないですね。

先程申しましたベルリンの「愛と魂」について話した際、先ず、参加しておられる方に「自分の親を愛していますか？ 子供を愛しますか？」とお聞きしました。親に愛された記憶がない人は、ここで環境問題・愛と魂について議論を深めることは難しだろうと思ったからです。

「焉に忠にしては、能く誨うること勿からんや」の部分で、アベノミクスを思い出しました。安倍さんは今、ふんぞり返っています。一本目の矢は何とか上手くいき、二本目の矢も一応成功したとなっています。しかし三本目の矢は失敗しました。それは認めずに、新しい三本の矢を打ち出しました。何とも姑息ですね。今の安倍さんに対して諫める人はいないのでしょうか。今回の内閣改造は一応、周りからお友達内閣と言われないような布陣にしたと見えますが、本当に諫言はしていないと感じます。安倍さんに対して諫言できる政治家がどんどん出なければいけません。石破さんが外にいて安倍さんに対してどんどん諫言出来れば株が上がるでしょうに、中に取り込まれてしまったのでは話になりません。

この部分は、自分が所属している会社・組織で、上の人間が駄目だと思ったならきちんと諫めることが必要だと捉えればよいでしょう。ただ若い時などは特に、真正面から「こ

こが駄目だ」と言うのと相手が素直に受け入れないこともありますから、柔らかく言葉を包んで、相手がはっと気付くような諫言をするのがよいと思います。

私の体験を申しますと、シムックスの社長時代、お客様で友人でもあった或る会社の社長に、「あなたの経営方針は間違っている。このままでは会社は潰れるよ」と忠告しました。するとその社長は真っ赤になって怒り、「出入り業者がそんな口を叩くな」と聞く耳を持ちませんでした。結果として、数年後に倒産してしまいました。

翻って、自分も人から諫められることがあるでしょう。氣にくわないことを言われて一瞬腹が立っても、フーッと氣を鎮めて相手の言うことを本氣で聞いてみると、自分でも思い当たることが出てくるものですから、そういう癖を持つと良いでしょう。

【九】子曰く、命を為るに、裨諶 之を草創し、世叔 之を討論し、行人子羽 之を修飾し、東里の子産 之を潤色す。

これは、鄭という国の外交文書の書き方を説明しています。

孔子が言うには、鄭国の外交文書は、裨諶が文案を練って原稿を書き、世叔が内容を検討し、外交官である子羽が文章を添削した。それを東里に住む子産が、格調高い文章に仕上げた。よって素晴らしい外交文書が出来た。

鄭という国は小さい国ですから、隣国と巧みに外交して国を守っていたわけです。その外交文書は四人の賢人の手を経て、草創・討論・修飾・潤色という順番で出来上っていました。

ですからこの文章は、自分で論文等を書く時に参考にされると宜しいでしょう。自分一人で作るのではなく出来れば信用できる三人くらい、それも同じくらいの力量のある人ではなく、それぞれ専門知識を持つ方々に見てもらおうと良いでしょう。

【十】或ひと子産を問う。子曰く、恵人なりと。子西を問う。曰く、彼をや彼をやと。管仲を問う。曰く、人や、伯氏の駢邑三百を奪う。疏食を飯い、齒を没うるまで怨言無しと。

孔子の人物評論と捉えればよいでしょう。

或る人が孔子に、子産はどういう人物か尋ねた。

孔子が「恵み深い人物です」と答えた。

子西について尋ねた。

孔子は「あの人はですか・・・」とだけ言い、あとは何も言わなかった。

子西は素晴らしい人物で楚の名宰相と言われていましたが、孔子の登用を邪魔した経緯が腹にあったので、敢えて評論しなかったのでしょうか。

又、管仲について尋ねた。

孔子が「この人はかつて、伯氏の領地である駢邑の三百戸を奪ってしまった。伯氏は粗末な食事で死ぬまで貧乏をしたけれど、それでも管仲を怨むことはなかった」と答えた。

だから管仲は相当の人物だと褒めています。論語の中で孔子は、管仲について凄く褒めている時もあるし、けなしている時もあると覚えていて下さい。

【一一】子曰く、貧しくして怨むること無きは難く、富みて驕ること無きは易し。

孔子が言うには、とても貧乏に生まれ育った人は、周りを恨んだり愚痴を言わないのは難しい。金持ちになっても威張らないのは簡単である。

自分自身や周りの人間に置き換えてみると宜しいでしょう。金持ちになるのと貧乏なのと、どちらがいいでしょうか？ 私はどちらでも良いと思います。貧しい人から見たら羨ましい宝物でも、お金持ちには持て余すものもあるでしょう。金持ちであるとか貧乏というのは、本人の考え次第で変わってきます。心の持ちようで、「少欲知足」「足るを知る」を知っていれば、そう自分の人生捨てたものではないと思えます。今あるもので満足する、言葉で言えば「食らない」、それが自分自身に沁み込んでいけば良い人生が送れます。

論語は全て、自分自身の＜人生如何に生きべきや＞という命題に対して、こういう人生が良いなあという答えを色々な形で示してくれます。そこに至る道筋、努力の仕方も教えてくれます。ですから非常に良いものだと思います。

孔子自身は、自分の理想を追い求めたまま一生涯を送りました。自分の力を発揮したい、天から与えられた使命を果たしたい、そのためにはどこかの国に召し抱えられなければなりませんから、必死になって主君を求めて放浪の旅を続けました。けれども思うようなポジションに就けなかった。そこで、弟子を育てて自分の志を伝えていこうと考えました。今で言えば就活塾で、就職を期待する人たちが集まって孔子のお弟子さんになったわけです。その弟子たちが各国に散らばってそれぞれ良いポジションに就き、功績をあげるにつれて孔子の名も上がるけれども、師匠の孔子までは雇ってもらえないという状況で、最後まで自分の志を遂げられず諦めの境地に達して死んでいったと私には見えます。

しかしながら孔子が経営した就活塾は、その時代だけでなく時代を超えて、国を超えて、歴史にずっと名前が残って現代に伝わっているわけです。文明法則史学の観点から見ると、今の時代は西洋文明が終焉を迎え東洋文明がこれから脚光を浴びる、その転換期にあります。ですから一つの国が潰れるのは当たり前、新しい国が興るのも当たり前です。そういう時代まで、孔子の考え方が生き残っているというのは凄いことだと思います。一見、論語はごく当たり前のことを書いていると思われそうですが、中身が相当深い。そう思って読まれるとよろしいでしょう。

少欲知足

本ご紹介する本は、ひろさちやさんの書かれた『けちのすすめ』です。「けち」といっても、サブタイトルに「仏教が教える少欲知足」とあるように、キーポイントは「少」という文字で見れば良いと思います。

最近、「少」という文字が気になります。三島中洲は65歳で脳出血で倒れた後、自分で自分を戒める言葉を作りました。「長眠少食」（長く眠って少なく食す）です。貝原益軒の『養生訓』には、長生きするには「接して漏らさず」とあります。これも「少」です。欲を減らす、食べ物を減らす・・・どうやら「少ない」ということが生きていく上でのキーポイントになってくると感じます。

新聞記事から見えるもの — 道徳心の欠如 —

新聞の見方、ポイントを申します。まず前提条件として、新聞は知らない事は無意識のうちに嘘を書きます。それから新聞には広告が沢山掲載されていますから、スポンサーの悪口は書きませんね。当然、手控えます。更に、その国の指導者におもねって、つい国が進めたい方向に筆が向いてしまいます。ですから新聞・メディアは割り引いて読まなければいけません。

新聞を読む時の三つの視点については何度も申し上げていますが、先ずは政治を見なければいけません。民主党が政権をとった時には、民主党の打つ無様な手を注視して下さいと申しました。今の自公政権は良い事と悪い事と色々混ざりますから、自公政権の打つ手を是々非々で見て下さい。次いで自然災害、三番目が国債の動向。この三つを気をつけて見て下さい。

そういう視点で見ると、本日の日経新聞から気になった記事を拾ってみます。

- ・杭45本のセメント量も改ざん 旭化成子会社
- ・足踏みの景気 「新3本の矢」 冷めた市場

二つの記事から透けて見えるのは、道徳心の欠如です。

同じ日経新聞のコラム「春秋」には、渋澤栄一について書いてあります。

明治6年設立の第一国立銀行は名前と裏腹に民営だった。トップの総監役に就いたのは渋澤栄一。彼が自ら作った契約書の草案がユニークだ。銀行の最寄りに住まい、銀行をわが住居と心得、業務時間外も銀行の取り締まりに意を配る——。そんな条項を入れたからだ。

民の力を発揮させることが課題なのは今も変わらない。安倍政権は「経済最優先」に軸足を戻してGDP（国内総生産）600兆円という壮大な目標を掲げた。きのうは経済界との「官民対話」の初会合を開き、投資拡大を促した。ただし問われるのは民が活動しやすい環境をつくるため、どれだけ政府も汗をかけるかだ。

第一国立銀行の行章は星形を2つ重ね、「ダブルスター」と呼ばれた。「朝に星をいただいて出勤し、夕に星を眺めて帰る」という勤勉さを表したものだ。規制緩和や法人税引き下げなど懸案が山積の今の政府も、一つ一つ仕事を仕上げる根気強さが要る。契約書で全力を尽くすことを誓えるくらいの気概はあるだろうか。

渋澤栄一については、調べると実に面白いです。渋澤栄一の書いたものには、これから日本の国が経済的にどんどん良くなると感じさせるような良い文章が沢山残っています。その辺りの話しを、来月、金鶏神社社稷祭の記念講演でお話させて戴きたいと思っています。

お時間になりました。最後に恒例の質問を致します。

- 昨日一日、嘘をつかなかった方
- 昨日一日、良い日だったと思う方
- 昨日一日、有難うと言い、有難うと言われた方

首を傾げている人がいますね。夜寝る時に思い出すようにすれば、翌日覚えています。

夜寝る時、癖にして戴くとよろしいでしょう。

- 昨日、健康法を実践した方
- 昨夜、明日を過去形でイメージして寝た方
- 昨日、自分磨きをした方

皆さん、切磋琢磨を実行されると良いでしょう。

以上で本日の講話を終了させて戴きます。有難うございます。